

植物風情の出生とは、風雨の障碍によつて枝葉の損せられ、又は兒童などの悪戯によつて枝を折られ、皮を剥がれたりなどしても、来る春に若芽を吹き出して回復に勤め、或は折られながらに花を開く。葉の悪しきものも花の麗しきがため、其の長花を探られ短葉を捨てらるゝ類をいふのである。人にして弱者を虐げ、他人の短所を誇りて長所を云はず。一旦障礙に逢へば直ちに意氣の銷沈するなどは、植物風情の出生に鑑みて恥づべきでありませぬか。

斯く觀じ來れば植物の出生は常に吾人に風趣を教ふるのみならず、併せて修養に資する所多大なるものであります。

讀者茲に留意するあらば著者望外の幸福であります。

出生 投入花と盛花 全 (終)

附 録

所謂秘傳と稱する葉もの、組み方と蔓もの、巻き方と

生花、插花、活花、投入などゝ名稱に區別はありますが、花を瓶器に挿し入れようとする時に當つては、各植物の有する形態を無視してはならぬ、自然を尊重せねばならぬことは論を俟たないのであります。流儀花であるから一流内で定めた通りにせねばならないと、主張せらるゝ方々に對してまでも、敢てかうせよと云ふ譯ではありません。けれども既に覺醒され、大自然に従つて花を挿し入れたといふ希望を抱かるゝ方々には強ひてお勧めいたしません。總て花を瓶器に挿し入れて床なり卓上なり机上なりに置くには、大自然に悖らない範圍に於て、應用變化させねばならぬと云ふことは先づ第一に心得ておかねばならぬ根本義であります。

葉組みもの、組み方 (花名五十音順)

〔あまりりず〕 花戸より配達するとき、花一本に對して葉四五枚くらの重ねて括つてあります。この植物は葉の組み合つた側から花が出ますから、水盤或は籠に入れるとき、葉の表面を中にして組み合せ、奇數を喜ぶ人に三枚或は五枚、偶數を是とするものは四枚一組として入れ、組み合せた葉の向側より花軸を出すと前方から見ても花と葉とが同一の根莖より出たやうに見えます。葉のみに流儀の花格を作るも、花と葉とで規矩に當て嵌めるも隨意であります。葉の五本と多く入れるときは、前方に入れるのを此の方法で、後方に入れるのは葉數を少くしてよろしうございます。

〔あやめ〕 花の咲く頃に葉より花が高くなります。生えた葉の形よく組み合つたのは別として、多くの葉は振れてゐますから、口繪第十三圖葉組みの通りになりかねます。強ひて流儀の花格にするならば、先づ葉を何れも一枚宛に解き離して、振れたのを逆に撓めて癖を直し、そして口繪第十三圖の通り、左右の

短い葉は前方に、中の長いのは後方にして、葉と葉との接觸する部分を觀覽者に知れないやう、粘液或は糊にて附着させると、行儀よくなるのは勿論、自然に出來た恰好のよいものと同じなのが得られます。どうでもよいからと云つて花と葉とが同じ背丈では美的見地より好いとは云へません。此の葉は細くて見映に乏しいものですから、葉の丈の四分の一或は三分の一くらの花を高くするはうが見よいものであります。

〔いちばつ〕 此の種類の中では葉の幅の廣いはうであります。瓶器に挿入するに當つて、多くの場合、葉の一組は三枚くらのよいでせう。併し土地によつて葉の細いのが生えます。此等は五枚一組にしてもよろしうございます。以上葉の一組みに對して花は一本が普通であります。自然に生えた葉を其の儘瓶器に入れると、葉が上反になつて恰好と云へないことが屢々あります。かゝる時には自然と反對に入れると可なり恰好になつて、觀る人をして自然の逆に通に使用することを感じしめなくならぬであります。花は葉の組み合つた向側に入れ、花で天地の三才を作るのがよろしうございます。

〔いどらん〕此の葉は輪生、口繪第三十八圖中右方のやうになつてゐますから葉で流儀の花格を作るもよろしく、その中より花軸を出すのも、又花と葉とで天人地の三才を作るもよろしうございます。風情として見る場合は壺、手附の籠などに斜に入れ、葉を口繪第五圖のやうに前方に入れても見られます。

〔いぬがんそく〕花戸にて覆ぐ褐色のものは、葉の輪生に組み合つた中央に生えるものであります。内部が向き合つて輪生に立つてゐますから、瓶に挿すときもその心もちで取扱へばよろしうございます。生えてゐるときは背丈が大抵一定してゐますが、瓶に入れるに當つては、長短にせねば雅趣がありません。又風情として見る場合は、掛花器の天地の狭い口に挿し、内部を上方に向けて入れても見られます。

〔いりす〕葉は葉のみ組み合つて生え、花は花として側から生えてゐます。葉の組み方は口繪第十三圖のと同じです。花は組み合つた葉尖より下方に在ります。此の葉はかきつばたの葉より枚数が少いたため、中央の葉が長いやうに見えるのがあります。

〔をぎ〕葉は葉で組み合つたのもあり、葉の組み合つた中より穂の出るのもあります。これを瓶に入れるとき、葉と穂と別々にせず、葉の組み合つた中から出てゐるやうにするはうが、自然らしく見えます。多く入れる場合は、其の中心で少し斜にした風情の作るのも悪くはありません。すゝきと葉が似てゐますが、すゝきは葉の元に毛がなく、をぎは毛があります。

〔おほほこ〕叢生した葉腋から花軸が出ますが、皿様の器物にでも入れるとき花を多く入れるのは雅致があるものとは云へません。花三本葉七枚くらゐがよろしいでせう。

〔おもだか〕この葉は雅趣に富んでゐるものであります。花莖を葉で圍んで生えます。又葉ばかりのもあります。瓶器に入れるとき葉で天人地の型を作るも又花と葉とで天人地の三才を作るもよろしうございます。花止めに挿すとき竹の極細いのを下方より挿し入れて置くと、形を作るのも容易であり、保つ上に於ても差支はありません。

〔おもご〕挿入する葉数は、流儀によつて、或は偶数を主張し、或は奇数を是

といたします。孰にしても、前方より見て左右左右と順序よく恰も日本服の襟の如くに下方がならねばなりません。此の葉を口繪第三十八圖右方の如く輪生に入れるのは見よくありません。内部と内部とを對生にするのがよろしうございます。葉の一组に赤い實の附いたのを二軸入れては不自然です。一軸入れるのが本當であります。又葉先の丈の揃つたのも醜いものです。(口繪第十五圖参照)

〔おらんだけい〕葉のみ輪生に組み合つたのと、一二葉で花莖を圍むのと生えます。けれども水盤に挿入するときは、花莖を葉で圍んで其の葉先を流儀の花格なり隨意の恰好なりに作るのがよろしうございます。花止めには挿すとき下方より細き竹を挿し入れて置くと、恰好を作るにも好都合であり、葉の保つても差支はありません。花止の穴の大なるがために莖を入れ、隙間を他のものでつめるときは結果がよくありません。木物より同じ莖の短く切つたほうがよろしうございます。

〔かきつばた〕花葉の生える順序は本書第二章第三十一節に詳しく述べてありますが、生えた葉の形よく揃つたのは別として、多くは其の儘用ゐるより、先

づ葉を一枚宛に解き離して、その葉の良いのを一枚選にして自然に悴らないやうに、口繪第十三圖葉組の通りに作り上げる時、葉と葉との接觸する處が、微細な毛のため水をつけても水玉となつてつかないものであります。さうしますと五枚組み合せた各葉が離れて一芽の葉とは思はれません。此を密接させるには、葉と葉との接觸する部分を、布切にて葉尖より元のはうへ徐々に摩擦するのであります。さうすると毛が摩滅して水が附着するやうになります。そして組み合せたものを一度全部水中に入れますと、毛細管引力の現象を呈し、水は葉と葉との間に昇つて五枚の各葉を密着し、さながら一芽より生え出た如く見えるのであります。又かうすると水が葉面の相當上方まで昇つてゐますから保つのもよろしうございます。

葉の表裏については否定することのできない見分方を發見いたしました。世俗葉の「日表」或は「日裏」と申しますが、私の研究いたしました自然の法則より申しますれば、葉の組み合つて居る植木、例へばかきつばたなどが、多くの星霜を経ますと、自然に圓形をつくるやうになつて、その外部になつた葉面には中央

の二筋が微に現はれ、内部の葉面には此も中央に微に三筋あらはれてゐます。此の葉面に強ひて表裏の別をつけますならば、二筋の方を裏と云ひ、三筋の方を表と云ひたいと思ひます。

花の活用法についても私の研究いたしましたのでは、最初に開く花瓣の三つの中、俗に云ふかむり葉を中心として前に一片と、後に二片となります。此の一片のほうが多くは所謂外部に出るのでありまして、語をかへて云ふならば、生えてゐるのを前方から見ますと花瓣の一つのほうが正面に見えると思ふのであります。

〔かはほね〕 根莖は水中に在るので見ませんが花莖は葉腋から出てゐます。けれども瓶器に入れる場合には、花莖を葉で圍んで挿すほうが相應しく見えます。花の丈は葉と殆んど同じか或は少し上方です。大自然を知らない人の多い場所で、花莖を自然の通り葉腋から出しても、異様の感じを起さしめ、勞して効のないことがあります。自然に従つて挿すと否とは挿者の意に任せて置きませう。

(口輪第十一圖参照)

然し瓶器に挿す場合には、葉の丈の四分の一或は三分の一くらゐ花の方を高くするが恰好でせう。

花止めに挿すとき莖の下方より極細い竹を挿し入れて置くと、花の形を作るにも具合よく、保つ上に於ても差支はありません。

〔がま〕 穂尖と葉尖との差は餘りありません。けれども瓶器に挿して眺めるのは、穂尖より葉尖の長い方が風情に見えるものであります。穂ばかり入れるのは趣味がありません。葉を組むのは二枚宛を腹合せにし、その中より穂を出すのがよろしうございます。(口輪第三十九圖参照)

〔からぢゆいむ〕 此の葉は殊に綺麗ですから、葉のみをおもたか、かはほねの如くに組んで、天人地の三才は葉尖で作るがよろしうございます。

〔ぎぼうし〕 大形の葉と小形の葉とがあります。兩方ともに、葉は葉のみ組み合ひ、花の莖は一二葉を附けて地上に生えます。けれども瓶に挿すときには、花莖を葉で輪生に圍んで入れるがよろしうございます。流儀の花格にするときは、三枚の葉で三才(天人地)を作り、花を度外にする場合と、花を天の位置に

して葉で人と地との位置を作る場合と、花を二枚宛の葉で囲み、各一組宛で天地を作る場合とあります。以上は大形の葉を使用するときに行ふので、小形の場合には、花莖に各三枚或は二枚宛囲ひ、莖の長いのを天の位置に、次の人の位置に、短いのを地の位置にし、水盤が大きければ、以上の順で数多く入れてもよろしいとございます。全體の花の数は奇数がよろしく、葉の数も亦同じであります。

〔くわゐ〕

おもだかよりすべて大形で、取扱ひは同じでよろしいとございます。

〔しをん〕

口繪第二十三圖の如く花莖と葉とは別れて地上に生えます。花戸では別に生えた葉を花莖に添へて渡しますから、實地を知らない初心者は花莖下方の葉であると思ふのであります。初心者が瓶器に挿入する時には、二方或は三方より葉で花莖を囲んで挿すのがよろしいとございます。研究の進むにつれて、花は花、葉は葉と、別々に入れて、大自然の風情を作るがよろしいとございます。流儀によつては、葉で天人地の位置を作り、花を二本くらゐで長短に挿すのもあり、二枚の葉で一本の花莖を囲み、各一組宛で天人地の位置を作るの

もありません。

〔しやうぶ〕

花として見るべきほどではありません。が、葉の勢は格別によいものですから、地味な所に相應しいものであります。葉は口繪第十三圖の如きには、葉の中筋が高くて組めません。假令組んでも葉と葉とが密着いたしません。此の種は自然に葉組のほどよくなつたものが可なりあります。これを用ゐるのが最上です。穂が澤山にありません。が、あれば一瓶中に一本くらゐがよろしいとございます。

〔しやが〕

口繪第五圖にてあらはした通り、葉は一方に斜になり、尖端は下垂してあります。葉の組み方は口繪第十三圖と大差はありません。然し葉尖の長短は是非せねばなりません。著しくするには及びません。

〔しゆらん〕

花戸より配達するもの、或は採集して来たものを其の儘用ゐては、雅趣に富んだ恰好にはなり難いものです。誰が見ても好いと思ふ形を作らうとするには葉を一枚宛に離し、良好のを五枚七枚或は三枚宛に組み、下方を黒糸にて括り、その中で長いのを天の位置、次のを人或は地の位置にして、葉

尖の揃はないやうに長短をつけるのが肝要であります。春に花を挿すならば、葉の組んだのを集めた前方に添へ、夏より秋に實を入れるならば葉の組んだのを集めた右側或は左側より出すが風情に見えます。冬に實の殻を入れるのも亦同じであります。花及び實を入れる場合と雖少數の方雅致に富み、多數を入れれば之を殺ぎます。(口繪第九圖参照)

(ずるせん) 本書第二章第一節に詳しく述べてあります。大多數は花莖一本に葉が四枚宛ですから、多くの場合二枚宛を腹合せとして、中に花莖を挟んで一本といたします。流儀の花形にするには、葉と葉とを粘液或は糊で密着させるのであります。熟練すれば葉と葉とを密着させることができず。それは腹合せとした二枚一組のを内部腹へ彎曲に撓め、双方より花莖を包圍し、細き紙にて悉く外部を巻き實挿花水揚法に記す水揚法を施し、一夜水中に浸し花を浸さす置く時は、思ふ通りになるものであります。

本文に「白いはかまを元の通りに嵌めるのであります」と、記しましたが、文意が簡に失して要領を得かねたかも知れませぬから、補足するといたします。

最初根元にある白い俗にはかまを抜き取る時、其處を揉んで柔にし、先づ花莖を徐々に抜き、次に中の葉を抜くと具合よく取れます。そして元の如くにはかまに入れるとき、花莖を其の儘入れようとしても這入るものではありませぬから、葉の四枚中内部になる二枚の下方を細く殺ぎ、そしてはかまにはのみ、後より花莖を入れるのであります。此も下方を半分か三分の一くらの殺いで入れれば容易に這入るのであります。斯様に葉なり花莖なりの下方を殺ぎましても、水をあげるのには殺がないのと大差ありません。

(すすき) 前述のをぎと取扱上同じ方法でよろしうございます。

(せきしやう) 瓶に入れる恰好なり葉の組み方は前述のしやかと大差ありません。花莖の出るのは前述しやうと似てゐます。

(せんでいくわ) 葉の腹合せに組み合つた中より花莖が出ずに、一方の葉腋葉間より花莖が出ます。花は黄金色のゆりに似て花莖は至つて細うございます。葉の形は何れも外部へ彎曲してゐますから、遠くより見ると葉の上方に花があるやうに見えます。宗全籠如き佗たものに相應しいもので、又木ものゝ根元に

添へるのも一入であります。器物が小さければ葉を解き離して、小さく組み直すがよろしうございます。(口繪第七圖参照)

〔そてつ〕 花戸より持參するのは葉ばかりであります。これは自然を尊んで挿すはうがよろしいでせう。即ち壺或は寸筒切の如き器物に葉を輪生に入れるのが相應しいのであります。葉數は矢張り奇數が一般に歡迎されます。輪生と云つても葉先の丈くらべは避けねばなりません。取扱上殊に折れ易いものですから、強くない火で温めると自由になります。

〔つくも〕 幾本かを一株として葉尖に長短を作り、それを幾株か集めて一個の形を作るがよろしうございます。天人地なり、右高く左低くなり、挿者の意に任せておきませう。

〔つはぶき〕 生えてゐるのは葉の丈が同一くらゐになつてゐます。が、瓶器に入れるときには長短を作らねば趣きがありません。口繪第二十七圖の通り葉を三方四方にせねば恰好がとれません。花莖は葉より高くなるのびます。

〔泥んふいーあ〕 花は葉腋から出ますが、自然の通りに入れましては目映りが

よくありません。花を葉で圍んで入れるがよろしうございます。葉先の向けやうは、葉の一方切れ凹んだはうが内側になればよいのであります。葉を水面に浮かせるとき同じ寸法の輪生にならないやう、少しづつ位置に變化させるがよろしうございます。(口繪第十七圖参照)

〔のくわんざう〕 花莖は葉の組み合つた中心より出ないで、葉腋から出ます。瓶器に挿入するときに、葉を一枚宛に離し、恰好のよい葉を對生の腹合せとして組み合せ、花莖は葉の向側より入れれば、前方から見ても葉腋より出たやうに見えるものであります。(口繪第七圖参照)

〔はす〕 大阪では住吉の公園、東京では上野不忍池、其の他多數此の花のある中で、花が葉の丈の半分も葉より突き出てるのは稀にも見ません。葉の丈よりは花首の二三倍くらゐ高いのが多く、偶には葉の下で咲くものもあります。中には葉の破れた穴より半分ほど突き出て花が開いてゐるものがあります。これは蕾の頃、他の方向より来た地下莖から出てゐる葉を、蕾の尖端で突き破つた後開花したのであります。瓶に入れるに當つての恰好は挿者の意に任せておきませ

う。池中に在つては、浅い所ほど水面に出る花葉の莖が長く、深い所ほどそれが短くなりまゝです。従つて深い方が繁殖いたしません。著者が毎度採集のとき池中に這入りましたが、浅い所では足に先に冷氣を覚えるのであります。深い所の莖は浅い所の莖より幾分細くなります。(日給第二十二回参照。)

〔はなしやうぶ〕葉の生ひ立や、繁殖の有様など、前述がきつばたと大差ありません。が、異なる點は花盛りの頃、花が葉のみ組み合つた尖より上方に在るので、一見上部は花のみ見えます。瓶器に挿入するときも、此の状態を參酌する必要があります。

斯道で古來本種は葉の組み合つた中、中心が高いと云ひますが、それは葉の繁殖がかきつはたより鈍いため見誤り易い點があるのであります。風情として見る時手附きの籠に葉を斜に入れ、花莖も斜に入れて見られるやうな、具合よく曲つた莖があるものであります。

〔ひつじごき〕前述にんふいーあと同じ性質であります。が、異なる所はただ總じて小形な點と、彼れの如き濃厚な種々の色のがないのとであります。

蔓ものの巻き方 (花名五十音順)

〔右旋〕みぎまきとは時計の針の廻る如くに巻きつつ登る蔓ものを云ふのであります。

〔左旋〕ひだりまきとは時計の針の廻るのと反對に巻きつつ登る蔓ものを云ふのであります。

〔巻鬚〕まきひげとは葉腋葉の根元より出す細い蔓狀の螺旋形になつたもので他物を巻き自體の安全を保ちつつ登るものを云ふのであります。

〔吸盤根〕きふばんこんとは葉腋葉の根元の處より一種の根を出し、樹木或は壁、石垣等に附着しつ登るものを云ふのであります。(葉で巻くもの葉柄が樹木の小枝或は竹などに巻きついて自體の安全を保ちつつ登るものであります。)

〔あけび〕吊船形の花器に入れ、一方の蔓をたらし、一方の蔓を吊緒に左旋に巻きつけますと愛らしいものであります。木にからみ附いた儘挿すのも亦一入りのものであります。花の時も果實の頃も共によろしうございます。

〔あさがほ〕 吊籠に入れて一方の蔓を吊手に左旋に巻きつつ登つてゐる風情をあらはし、一方の蔓を籠の外へ出しますと、何れかに高低ができて見よいものがあります。蔓の切り口が軽くて浮く時は、小石を括りつけて沈める方法もあります。(口繪第二十圖参照)

〔あをかづら(清風藤)〕 他の枯木に蔓を左旋に巻きつけて、壺などへ斜に入れるのも相應しいものであります。

〔あをつづらふぢ(木附己)〕 手附きの籠に入れ、蔓を左旋に巻きつけますと滋味のあるものであります。

〔いんげんまめ〕 掛花瓶に入れ、蔓を枯竹、かれ木などに左旋に巻きつけますと、田園一部の風景を想はしめるものであります。柱掛の花器に花のみ入れ葉と少しの蔓を添へても見られます。

〔系んごう〕 茎の丈夫なならば斜に小花器に入れてもよいものであります。丈を長くするには、手附きの籠か或は枯木と共に入れ、葉先の巻き鬚を籠の手か又は枯枝に巻きつけると一種の風情ができます。

〔おほぼくさふぢ〕 侘びた住居の床などに籠を用ゐて入れると相應しいものであります。茎が短ければ其の儘でよろしいでせう。木ものにも添はすれば、葉先の巻き鬚を小枝に巻かせる可愛いものであります。

〔かうもりかづら〕 舶來の蔓ものであります。大形の水盤を用ゐ、他の木に左旋に巻きつけて入れるのが適當でせう。

〔かがいも〕 吊船の吊緒に左旋に巻きつけて、下方より見上げるのも野趣があります。木ものに添へて見るのもよろしいございます。

〔かざぐるま〕 この蔓はどうしても他のものに葉で巻きつかせないとき趣きがありません。

〔からはなさう〕 吊瓶の緒に右旋に巻きつけて入れるのがよろしいでございます。澤山に入れるより少いはうが野趣があります。

〔きづた〕 後記つたの状態と大差ありません。

〔きんちやくづる〕 枯木などを添へて小枝に巻きつけさせるのがよろしいでございます。

〔ささずきかづら〕 莖が至つてしほらしい細いものですから、何か他物に右旋に巻きつかせて入れるのが適します。あまり少くは見映がありません。
 〔くず〕 秋の七草中に數へられてゐます。野生のは葉が大きくて小さな器物には適しません。強ひて入れるならば花のみ入れ、蔓の尖端と其の中の小形の葉とを添へれば見られないこともありません。大木を入れ蔓を左旋に巻きつかせると本當の趣きがあります。

〔ささげ〕 一輪挿しに花と葉とを入れても獨樂になります。蔓の左旋に巻いた風情を作るならば、他の木に添へるのがよろしうございます。

〔さねかづら〕 古くなつたものには、木本状を呈したのがあります。それらは壺に斜に入れるもよろしく、若い蔓は右旋になります。雅致があると云はれません。

〔さるなし〕 葉は見映のあるものでありますが、若い蔓は雅趣がありません。中古の蔓は左旋であります。

〔しさすすから〕 葉は美麗ですが、蔓は細くて何かに添はせねば十分の恰好

を見ることが出来ません。添はせるには節より出してゐる巻き鬚で止めるのがよろしうございます。

〔するーとび〕 花は美しいもので、中には良い香のするのがあります。蔓は短ければ其の儘に器物に入れても倒れません。が、大きく入れるには他の物を添へ、巻き鬚で保たせるのがよろしうございます。

〔すひかづら〕 若い蔓は右旋ですが、葉と葉との間があいてゐますから、なつはせのやうな木に巻きつかせて入れるが好適であります。古いものになると頗る形のよいものがあります。これを壺の如き物を用ゐて懸崖に入れれば得も云はれぬ風情があります。

〔せんになさう〕 葉で他物に巻きつかせますが、白い花で、香氣の甚だよいものであります。著者も田舎に居を移して研究中屢々床に挿し入れたものであります。書物には有毒とありますが、自分は好んで入れましたが何事もなくすみました。が、然し有毒とある以上は、花を入れた後、手は是非洗つて置かねばなりません。

〔たうなす〕 大阪地方でなんきんと云ひます。畑に在るのは葉も花も大きくて一寸した瓶器には入れることがむづかしくございます。けれども秋末の頃蔓の先端に小さくなつた葉と花とがありまして、風雅な形をしてゐます。懸崖に入つても、吊船に入つても相應しいものであります。

〔つた〕 若芽の蔓は節々より一種の根を出して他物に附きます。此を入れるには、まつやうな木に粘液で附けて入れるのが相應しいものであります。古く作つたのは木本のやうになつてゐますから、壺、籠などに斜に入れても、懸崖に入れてもよく似つきます。(口繪第二十五圖参照)

〔つるうめもどき〕 果實の赤くなつた頃花戸より配達しますが、青葉のときもうめの葉に似たのがよいものであります。私は果實の赤くなつた頃よりも青葉のときはうめが趣きのあるやうに思ひます。蔓は右旋になつてゐます。

〔つるごくだみ〕 蔓が右旋で、葉腋に白い小花が咲きますが、他の木に添はせて入れるがよろしうございます。

〔つるれいし〕 黄色の花が咲きますが、枯木或は竹などに蔓より出す巻鬚で巻

きつかせて入れるがよろしうございます。果實の出来た頃などは重くて自由になつかねます。

〔ていかかづら〕 花の頃匂ひのよいものでありまして、若芽は左旋に巻きつきますが風情に乏しく、中古のものが雅致に富んでゐます。此の雅趣あるものを懸崖にすれば恰好のものであります。

〔てつせん〕 葉で他物に巻きついて成長します。開花の頃瓶に入れるにも、常盤木か、或は笹などに葉を巻きつかせれば双方ともによく見えます。

〔とけいさう〕 前述のてつせんと同じく似てゐます。彼は葉で他物に巻きつきませんが此は節より巻き鬚を出して他物に巻きつきます。

〔なたまめ〕 白い花の咲く頃は見映のあるものであります。蔓は左旋になつてゐます。から、瓶に入れるにもその用意が肝要であります。蔓は左旋になつてゐます。

〔なつふぢ〕 夏の土用中に白い花が咲きまして、水盤に水を満たせ、かまつかのやうな木に右旋に巻きつかせて入れれば涼味を感じしめるものであります。

〔のうぜんかづら〕 有毒と書物には見えてゐますが、花が多数集つて咲き、観

賞に適します。氣根を出して他物に附着しますけれど、若い蔓は瓶に挿すことができません。氣根を他の木に附着させて入れるのは、粘液を用ゐるがよろしいでせう。

〔ひるがほ〕 日中に淡紅色の花が咲きますが、他の草に左旋に巻きついた儘挿すのが、最も野趣的であります。吊花器に入れてもよく似つきます。(日繪第二十圖参照。)

〔ふうせんかづら〕 細い蔓にぶらさがつてゐる果實は可愛いものであります。他の木に添はせて入れるのが適當でせう。

〔ふぢ〕 挿入の方法は周く人の知つてゐる所でありませう。蔓の巻き方については、本文に記載して置きました。が、此處にも重複を厭はず簡單に述べませう。白色の花で總の短いのが左旋で、長いのが右旋であります。紫色のは總の短いのも長いのも、又赤色を帯びた臺灣のも皆右旋であります。

〔へうたん〕 畑のは總じて大きく、一寸した器物には當籤りません。然し別に栽培しますと愛らしいのが得られます。吊瓶に入れても趣きがあります。吊緒

に巻き鬚を卷かした形は恰も赤子が背に負はれて肩先につかまつてゐるやうな感があります。

〔へくそかづら〕 野生に多く、蔓は右旋であります。

〔へちま〕 畑のものは總じて大きく、此を瓶に入れるには不適當です。別に栽培すると小さい果實ができます。これを木の枝に巻き鬚をまきつけて瓶に入れば可愛いものであります。(日繪第二十二圖参照。)

〔べにはないんげん〕 前述いんげんまめと大差ありません。が、異なる点は花が紅色であることです。

〔ほご〕 夏季には葉腋にまめの花を開きますが、蔓は左旋であります。用途は前述いんげんまめと大差ありません。

〔まるはあさがほ〕 前述あさがほと同じであります。

〔むべ〕 蔓は左旋になつてゐますが、巻きつかないで垂れたのが往々あるもので、それを懸崖にしますと、葉の具合と云ひ、蔓の先の曲り具合と云ひ、雅味のあるものができます。

〔やぶまめ〕 もろこしのやうなものに左旋に巻きつかせて入れますと一入風情のあるものであります。

〔やらば〕 夜、赤い花が咲きまして、日中には咲きません。でありますから、夜の會杯に挿し入れるに相應しいものであります。蔓は左旋であさがほに似、用ゐるやうもそれと大差ありません。

〔ゆふがほ〕 夜、白い大きな花が開きます。あさがほの左旋と彷彿たるものですが、總て彼より大形であります。

〔るかうさう〕 莖も葉も細く、花も小さけれど赤い愛らしいものであります。竹垣などを左旋に巻いてゐます。瓶にうつすには吊瓶もよろしく、他の木に巻きつかすのもよろしうございます。

斯道に於ける出生研究のため 採集に赴く人々に

井の中の蛙は大海を知らずとは、古い諺であります。斯道に於ても昔定められたことを金科玉條として、幾年経ても改良しないやうなことが、いくらもありまゝです。どうしても日に研究を続けなければ時代に遅れて知らず識らず井の中の蛙となるのは論を俟たないことでもあります。さて研究を始めようとしても、唯盲滅法に出かけたのでは、費した時間に對して得る所が餘りに僅少であります。試みに考へて御覽なさい、水先案内があつて航海するのと、それがなくして航海するのと、何れが安全で何れが危険でせうか。本書は斯道に於ける草木の出生(生ひ立)を實地に研究せんとせらるる人達の水先案内であります。されば一足先に出立させよう。同志の諸士女は途上を注意して、附近に在る必要なものを見落さないやう御出かけ下さい。往來の繁き道端には珍しい草や恰好の枝振り

のがありませんが、人通りの少い細道を行きますと時折よいのが見當ります。で、今少し歩んだならば又あらうかと、ついうか／＼向ふへ行つて、細道がなくなるやうなことが度々あります。こんな時に勇氣を出して、一つ此峰を越えて見ようと登る時に、途中で通らねばならぬのが、崖のやうな所でありませう。かやうの所は少し右とか左とかへ廻れば急阪になつた所があるものであります。木の根を堅く踏みしめ、其根が自分の體量を支へるに足るか否かを試して後右方の上部に在る木の枝を持ち、枝の折れ易きか否かを試し、次に自分の體重を吊り得るに足るか否かを試し、其の木を引くが如くにして我が身體を釣り上げ、同時に左足を前に試した左方の木の根に踏み止めるのであります。以上の順序を繰り返して登る時は、大抵の所ならば登り得ることは保証いたします。登りながら後方を顧みることがは絶対にしてはなりません。若し誤つて振り向く時は、頭がフラ／＼として、身體の中心を失ひ、或は墜落して一命にも關する程の重傷を負ふこともあります。假令かかる危険の憂はないにもせよ身體

の安全を圖るに如くはありません。かかる時に取りつくべき木の根もなくすすきなど生えてゐる所があります。その時は多くの葉を一つかみとすれば、可なり力になるものであります。が、此の草の類には葉の縁の鋭いのがありますから、豫防をせねば手の掌の負傷は免れません。林間を下るときも左右何れかの木を堅く持ちかへつつ進むのが安全であります。

山間には澄み渡つた池の中に水草或は藻類が生えて、自然美を發揮してゐる所があり、林間に在る池沼などには浮草や藻の類が一面に繁殖してゐて水底の知れない所もあります。何れにしても不案内の池は、注意しないと、淺く見えても意外に深い所があります。何れにしても、兩足を踏み入れるが最後、進退の自由を失ひ一人ではどうすることもならないことがあります。私は池中に這入るときは何時も細緒に石を括り附けてその深淺を計つて見ます。

日没前に道のない林間に踏み入るときには、所々の小枝に白紙を附けつつ進みましたが、元の道に歸つて來るのに目標が白くて睹易く容易でありました。珍しい草は三本生えてゐたなら、一本か二本は残して置くといふことは種を

絶さない利益のあるは勿論、他の人にも喜を與へることになりますから、徳義上是非實行して貰ひたいと思ひます。

數奇者が畑で栽培してゐるものは、假令番人が居ないからとて失敬してはならないのは云ふまでもないことであります。私が水揚法を實驗してゐる中、材料を集めようとするのに、萎れ易いものは花戸では店に置きませんから、どうしても自分で採集せねばなりませんでした。出かけて見ると萎れ易いものが數奇者の庭や或は畑に澤山あります。で、水揚法の研究に用ゐる譯を述べて所望すると、快く願けてくれるのが十中の十で、金を拂はうと云つても取らないのが又十中の十でありました。此等が研究と云ふ事業の賜と思はれます。

水揚法に就ては別に私の著述があります。が、一言しますれば、新しく切り直した莖の切り口に薄荷油を火箸の如きもので塗りつけ、滲みこんだ後に挿すか、又は莖の切り口を二つ割或は四つ割として稀鹽酸又は醋酸の液中に浸し、滲み込んだ後に挿すかであります。以上の兩方法中の孰れかを試して御覽なさい。

瓶器に挿入せる花の名稱

〔生花〕 一般に流儀花を指していふ名稱で、全國に多數の門弟を有する池坊や東京に於ける多數の各派古流は此の字を用ゐてゐます。

〔立花〕 昔はさうではありましたが、現在は小枝を幹に釘付けとし、草は莖の切り口を水苔で包み、細い竹などに括りつけ、種々集めて一個の形を作つたものの名稱であります。多くは池坊で行つてゐます。

〔挿花〕 遠州流系統及び關西に多數の門下を有する未生流一派の使用してゐる名稱であります。

〔活花〕 源氏流系統及び目下大阪市内で可なりの教師を有する遠山流が此の名稱を用ゐてゐます。昔は青山流でも用ゐたやうです。

〔挿入〕 昔は吊船に簡單に入れたのをなげ入と稱したことは仙傳抄に見えてゐます。現今東京で流行してゐるのは、宗全籠如き小形手附の籠に二種乃至五種の花を無雜作に入れた類のもので「おなげいれ」と云つてゐます。

〔茶花〕 好事家の侘住居に一枝挿す如きものを云ふのであります。

〔意匠花〕 題號に當嵌めようと意匠を凝して挿したものの名稱であります。例へば七夕にささをいける如きものです。

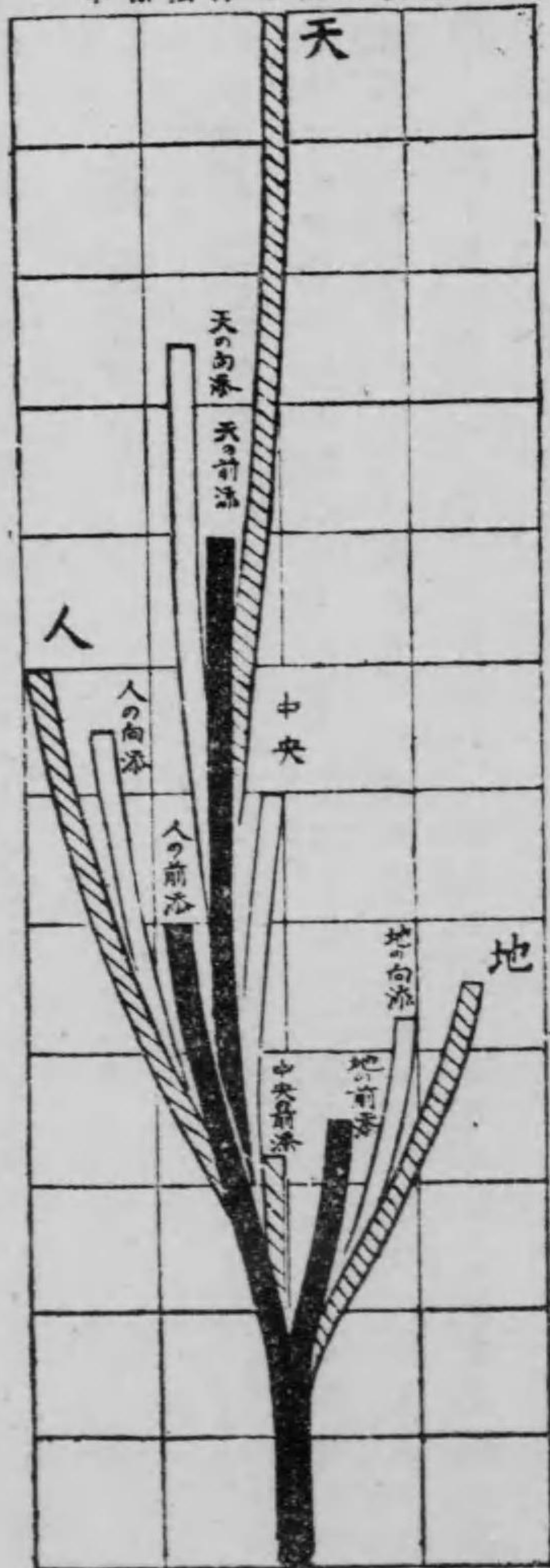
〔景花〕 風景の直寫とも云ふべきものであります。

〔盛花〕 皿の如きものに花首を短く並べて眺める主意のものであつて、洋室卓上に適します。

〔正花〕 不肖鷺洲の創めて唱へたもので、自然を根本として、而も自由自在に挿入する藝術的新花道の名稱であります。

其の他にも變つた名稱がありますが、世間一般に知れ渡るまでには中々であらうと思はれます。

鷺洲格式插花法標準



景花 (冬の山路)

去る頃攝津茨木在に假寓して斯道研究中、久定山の一部、雑木の一叢を瓶に寫して、公會の席上に陳列したのが本圖であります。(圖を参照せ)

格花挿法の標準

附 録
圖中の黒線は前寄、綫線は中間、白線は向寄であります。

花鋏の工夫

鋏の形は古より様々變つた形のものがあります。現今使用する中には、つるの
眼みが大きうて使用に不便なものもあり、幹切と云うて眼みのないものもあり、つ
るを體裁よく眞鍮で作つたのもあり、外國製で刃が新月形になつたものもあり、つ
す。斯くの如く形の違つてゐるのを、當今の盛花の如き密集させて挿す花體に使



用して見るに、それ〴〵缺點が見付かつたので、これを改良すべく考案し、大
阪天満寺町橋の國重と云ふ刀劍師に作らしめたのが即ち右に示した改良花鋏で
あります。

この鋏の特色は勞力を省くため、挺子の理刃の長に對するうでの長が三倍以
上を應用したのと、木の幹を鋏の刃が食ひ入るに容易ならしめんがため、尖端
ほど刃を薄くしたのと、密集せる花體の小枝を透すのに便利なるため、つるを
小さくしたのと、の三點であります。

附 録 (終)

附 録

終

